

## 石教研二次集会に参加して

恵庭幼稚園 教頭 井内 聖

今回、当園の教師を石教研二次集会に参加させるにあたって園として 2 つのねらいがあった。1 つ目は、授業参観を通して授業の組立や教材準備、指導案の作成など教師としての姿勢を学んでもらうこと。2 つ目は、小学校の教育内容を学ぶことによって自分たちが関わる幼児期の子ども達にどんな内容をどこまで教え育めばよいのか幼小連携の視点を持たせることである。

当日は、国語部会、図工美術部会、生活科部会に参加し、その後のレポートから参加した教師が独自の視点で授業を参観していたことが伺えた。国語部会のレポートでは、文字指導の観点から幼小連携のあり方がまとめられていた。このレポートは、昨年度から園内で検討されている文字指導のあり方に一つの方向性を示すものとなるであろう。図工美術部会では、単元及び教材への興味関心の持たせ方や教材設定のあり方について参加した 2 名の新採用教師に大きな刺激と影響を与えるものとなった。生活科部会には、当園から 6 名の教師が参加し、幼稚園の教育内容と一番近い教科だけに幼稚園現場でも使えるものはないかそれぞれの視点で参観していたようである。また、その中でも単元の組立や生きる力の育成についてまとめられたレポートがあり、参加した教師にとって今後の実践の参考になるものとなった。

恵庭幼稚園では、昨年度より教育内容を大きく見直し、教育目標の具現化のための手だてを新たに模索しているところである。その中でキーとなるのが、幼年期の発達と教育の連続性である。子どもを 3~5 歳の幼児期ではなく 3~7 歳の幼年期と捉え、その中で幼児の発達の側面（言葉、記憶、数量、推理思考、運動など）を支え伸ばす教育方法を見つけ、学童期の学びにつなげていくというものである。その為には、小学校低学年の授業内容とその後の中高学年につながる学びの内容を知っておく必要がある。また教科書の内容といった知識レベルはもとより、それによって子ども達にどんな力をつけさせたいのか、その準備段階として基礎となる知の礎はどのようなものなのかを明らかにすることも、発達と教育の連続性に必要なものである。そういった意味では、今回の石教研二次集会の参加は、当園教師の資質向上の観点以上に深い意味を持つ機会となった。

今後、今回の授業参観で学んだ内容を園内でさらに議論し、園内研究を深めていきたいと思う。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった、石教研関係各位に深く感謝申し上げます。

今回の授業は『くりをかかくしよう』ということで、秋の素材を使い幼稚園でも利用できるのではないかと考え、見学させていただくことにしました。

文科会でもお話があったように、今の子どもたちは栗に触れたことがない子、食べたことがない子が多いように感じます。秋の実に気づいているけど気づくだけ、それにもっとこうしたいと思わせてあげるのが、大人の役割なのです。

1年間を通して、春には春を見つけに、夏には夏を、そして秋には秋を...その季節にしかない物を見つける楽しさ、その見つけた物で次に何ができるのか考える面白さ、それを味わえることができる授業があることは素晴らしいことだと思いました。

時間が押してしまい1時間くらいの授業になってしまいましたが、子どもたちは集中力がすごくあるのだなと感心しました。栗の謎を解明しようと一生懸命で、どうなっているのだろう、もっと調べてみたいという意欲的な子どもたちばかりで、笑顔で行っている子も多く、楽しんでいる姿があり、子どもの栗に対する興味・関心が深まったのではないかと思います。

うちの幼稚園でも季節を感じさせてあげたいと思いから、公園に秋を探しに行きました。公園ではくるみやどんぐりを見つけ、栗も拾ってきました。園児も小学生と同じで、栗の中身が気になり、園に戻ってからみんなで調べました。その時はまだ栗が小さく実になっていませんでしたが、「いがいがの中に栗が入っている」と発見することができました。栗の葉っぱを使った遊びはまだ行っていないので、指令4の「葉っぱ博士になろう」を園児向きに変えて遊ばせてあげたいと思います。

今回の研修で参考にさせていただくことが沢山あり、くりくり星人からの指令のビデオや黒板に貼る教材など、手が込んでいて子どもに興味を持ってもらいたいという気持ちが伝わってきました。私たちが子どもにやってみたいという気持ちを持たせることは、小学校の先生も幼稚園の先生も同じく大切なことで工夫が必要なことを改めて考えさせられる良い機会になりました。授業を見学させていただき本当にありがとうございました。

## 石教研専門部会研究集会に参加して

福本 恵美

今回の研修にあたって様々な部会がありましたが、一番幼稚園とつながりが深いと感じた授業内容と研究主題に興味をひかれ、生活部会に参加しました。

まず、初めて行く学校での子どもの様子を見て初めに気にかけてところは挨拶でした。今幼稚園で力を入れている挨拶。自分から進んで挨拶をするということにやはり期待していましたが、実際子ども達の反応には欠ける面があり、園での指導にも更に力を入れなければと感じました。

授業に関しては、ねらいの部分に視点を持って観察し、学ぶところも多かったです。子どもに感じてほしいこと、今の幼年期に体験しておくべきこと、幼稚園と小学校1年生との差はそれほど感じませんでした。「子ども一人一人の良さや可能性を伸ばし、生きる力をつける生活科の創造」という研究主題にもあるように、目標とするところにほとんど変わりはありません。幼稚園の今の時期の子ども達だけを見るのではなく、学校に入ってから、大人になったらと、先を見ていくことで、一つ一つの活動や日常生活の中での体験がとても重要になっていくものであり、教師側の思いが子どもの成長に大きく表れるものだと実感しました。

秋は、自然と触れ合い、自然を身体全体で感じる事ができるとてもいい季節であると思います。授業内容は秋の自然の素材を存分に生かした内容でとても興味深いものでした。グループに分かれて行っていましたが、どのグループも楽しめる内容でした。教師がついていないところでも、グループのリーダーが仕切って、「何の匂いがする？」など言ってプリントに書くようまとめたり、一つの実ばかりではなく違う実についてもそろそろやらなくてはいけないということも考え、時間の配分をある程度は頭にいれて声を掛けていました。まさに、子ども達が主体となって活動を進め、それぞれがよく観察し、色々なことを発見し、学んでいる姿でした。

実際に自然物を間近で見たり、触ったり、匂いをかいだり、食べたりと、五感を十分使って体験することで、自分の感覚を形成し、イメージや発想が広がり豊かな感性が育まれていくものだと改めて感じました。そして今、子ども達に体験させてあげられることを存分に楽しんでもらおうと思いました。

今回は、たいへん勉強になる研究会に参加させて頂き、ありがとうございました。幼稚園でも日常生活の中で、たくさん遊び、色々なことを体験し、多くのことを学びながら大きく成長して欲しいと願っています。たくさんの資料、御苦労様でした。とても参考になります。今後活かしていきたいと思えます。

## 石教研図工美術の研修を終えて

井下 真理子

石狩市立南線小学校の吉道久美子先生の図画工作科学習では、「おもしろいかたちいっぱい ~いしのへんしん~」という授業が公開されました。この授業は3 / 4時間目で前の時間に石を集めたり形をよく見たりと石にたくさん触れたようでした。今回は、石の形を生かし、積み重ねて立体的に自分の好きなものを作っていくのですが、吉道先生は石の接着をボンドではなく、粘土を使用していました。そこで私は、なぜ粘土を用いることにしたのかを考えながら、子どもたちの様子や姿を視点として見ていくことにしました。

活動が始まると、子どもたちの取り組む姿勢は一気に真剣になり、石を手にとると前から考えていたかのように、すぐに組み立て始めました。このようにすぐに取り組むことができたのは、前の段階で石をたくさん見ていたからか、すでに子どもたちの中に作りたいものがあったのだろうと感じました。粘土での接着は、あまりくっつかず難しいのではないかと思いましたが、子どもたちは手を器用に使い石が崩れてしまわないように慎重に行う姿が見られました。上手くつけば次々に石を接着していき、作業に集中していました。最後に作品を何人が発表する時に、吉道先生は石の特徴を生かして作った所を子どもたちに伝えることで、自分の作品だけでなく他の子どもの作品にも共感する場を作っていました。私はこの様子を見て、改めて言葉かけの大切さを考えさせられました。

事後研修では、指導過程や方法を聞いたことで授業の中だけでは見えない教師と生徒の姿を捉えることができました。石を用いるという意見は子ども、石で立体的に何かをつくってみようという提案したのは先生、粘土で接着するというのは子どもからでてきたことであり、段階を一步一步進んでいったとおっしゃっていました。粘土で接着するという声は、前の段階の時にただ石を重ねていくよりも間に粘土を挟んでいくほうが崩れず、高く積み重ねることができるということを体験していたから、子ども自身から出てきた言葉だと言っていました。そして吉道先生が粘土を用いた理由は、ボンドだと乾くまで待たなければいけないし、教師が手を貸すことになってしまい子ども自身での作品にならなくなってしまうが、粘土はよく使うもので子どもが自分で接着でき、すぐつけることができ、次の作業に進めやすく集中して取り組むことができる、また失敗しても何度も作り直しができると思ったからだそうです。このようにボンドの代わりに粘土を用いたことで、子どもの集中力を引き出し想像力をふくらませることができるということに驚かされました。

研修で幼年期の子どもは様々なものへの興味が高く、鑑賞活動から表現活動へとつながっていけるということを知り、幼児のうちから様々なものにたくさん触れて、ものの特性を知り、表現する力を増していけるような環境作りを見直していかなければならないと考えさせられました。小学校1年生の授業を見れたので、自分の保育と照らし合わせながら考えさせられることが多く、とても良い研修となりました。



## 石教研に参加して

木下美穂

今回石教研の生活科の授業を見学するにあたって、「くりをかがくしよう」というテーマの調べ学習に対して子どもたちがどのように関心を示し、学んでいくのか興味があったので子どもたちの授業の様子と、教師側の援助がどのように行われているかを中心に見ていった。

最初の導入の場面は、事前に話していたことの確認のみだったが、よく子どもたちは自分たちが今日行う内容を理解していて、活動に対する意欲が伺えた。そしてそれぞれのグループに分かれての実験・観察に入ると、個々が各グループのテーマについて真剣に行う姿が見られ、その学習意欲の高さが印象に残った。特にくりとウニを比べるグループの子どもたちは、座りっぱなしだったにも関わらず、よく飽きずに終わるまでの時間をワークシートの書き込みを行ったり、イガとトゲを並べてじっくり虫めがねで観察したりしていた。教師は全体を見ながら各グループに声をかけて回っていた。その声かけは感覚に気付かせる内容のものが多かった。「どんなにおい?」「どんな手触り?」と子どもの気付きの手助けをしていた。

授業見学後に学習活動案を見て、なぜ子どもたちが意欲的にあの時間、実験や観察に取り組めたのかは、やはり今までの導入と細かい授業のプランニングに理由があると思った。ここまでいろいろ考えて「くり」という教材を選んだのか、12時間の今回の単元で行ってきたものはこんなにあらかじめ計算された流れがあったのか、ワークシートやビデオなどの準備したものはこんなにあったのかと、ただただ驚いた。子どもの興味、知りたいという思いを引き出して、自然にその思いをサポートするということはなかなか難しいことである。このように小学校では、一つの単元に対して綿密に計画を立てていることを知り、教師側がきちんと見通しを持って計画を立てること、子どもの様子に合わせた教材を用意することが大切であると改めて思った。

また資料を見て小学校ではただ楽しいだけ、体験するだけではなく「なぜ」と好奇心をもち、自分なりに何かに気付き、主体的に活動していこうとする意欲を育てるということ、感じたことをどう生活化させていくかということを重視しているように感じた。それが生活科の授業で身につける生きる力につながっていくのだろう。幼稚園でもこの考え方がこれから大事になってくるのではないだろうか。いろいろな体験をさせるだけではなく、それを次にどうつなげていくかを、保育を行ううえでこれからは意識していかなければいけないと思う。

## 石教研専門部会研究集会に参加して

小端 未来

私は生活科部会に参加しました。幼稚園での活動にも何かヒントになると思い、選びました。

実際授業を見て、普段の子ども達の様子は分かりませんが、たくさんの大人の中でもほとんど動じることなく授業を受けていたように感じました。栗という一つの教材を利用して、12時間ものコマを使うことにも驚きましたが、約1時間の間に分担された役割だけをするという子どもたちの集中力にも驚きました。そこは幼稚園児と小学生の違いだと感じました。しかし、グループによって調べる内容が違ったせいか、時間のかかり方、内容の濃さに少しムラがあったように感じました。やはり、外に出て大きな栗を自分で探して、最後に重さを量るグループと、ずっと机で調べているグループを比べると、私個人的には子どもの食いつき方も違うと思いました。

今回栗についての4つの疑問をみんなで調べていました。`イガイガ星人からの指令`という設定でした。担任の先生の話では、「子どもからいくつか疑問が出たが1年生の疑問は非現実的な所もあるから教師側から提示した。ただ、`教師から`は嫌だったのでイガイガ星人からの指令にした」と言っていました。子どもがより興味を持つために、イガイガ星人や手作りのビデオを使い導入を工夫している所は良いと思い参考にしようと思いました。ただ、子どもが言うことは非現実的な所はあるかもしれないが、せっかく子どもからいくつかの疑問が出ているのであれば、どれか一つでも使ってみてもいいのではないかともしました。

今の時期にしかできない木の実を使った授業はとても良いと思います。従来では「はっぱのいろがかわったよ」という授業で栗を使ってはいなかったようで、自分達の学校にある、また身近にあるものを利用した所も子ども達にはより興味の出る教材になったのではないかと思います。私も幼稚園で秋にしかできないクルミやドングリを使った活動をいくつか行ってきました。幼稚園では散歩がてら近くの公園に木の実や葉っぱを自分の手で拾いに行き、自分で拾ったものを使う、という所から導入になります。時間や時期の関係もありますが、自分で拾いに行ったものを使うと子どもたちの興味も深まるのではないのでしょうか。

今回、普段ではなかなか見ることのできない小学校の授業を見せていただき、貴重な体験ができました。私が小学生だった時はギリギリ生活科の教科がなく、正直どんな内容のものなのか分かりませんでした。他の教科に比べて幼稚園と繋がるものがあるのではないかと思います。子どもたちは約1時間の間集中し、且つ、笑顔で楽しそうな様子でした。担任の先生の子どもの発言にはどんな小さなことでも一つずつしっかりと拾って、答えて、褒めている姿を見て、見習おうと改めて思いました。ありがとうございました。

## 石教研修に参加して

小西 香織

千歳市立北陽小学校1年生の生活科の授業を見ながら、私も小学生のときのそのような時間を思い出した。とにかく他の学科に比べても、いつもわくわくして楽しみだったことを覚えている。今日の子どもたちも、一人ひとりがとても意欲的で授業を楽しんでいるようだった。そして、その裏には何より担任の先生の地道な準備や見通しを持ったねらいがあってこそだと痛感した。活動案を読ませていただくと、たった一つの単元だが、綿密な学習計画がたてられておりとても明確だった。これをすべての教科で行ってると考えたら、その苦勞は計り知れないものだ。

実際の授業では、指令ごとに分けられた子どもの様子を見ていき、その1「栗とその他の木の実を比べよ！」グループでは「色、大きさ、におい、形」と調べるテーマ以外に中を割って食べるという『味』も経験していた。先生は途中に子どもの動きをみてつまようじを渡し、そんな姿も予想していたのだと思った。その2「栗キングを決定せよ！」グループでは7箇所に分かれて栗を拾い、どこの木に実の詰まった栗がなっているかを調べるため、拾ってきた栗を10個ずつ量りにかけて、重さを競い合っていた。この活動はとても斬新なものだった。子どもたちの意欲がわくのが理解できる。その3「イガトゲ比べをせよ！」グループでは、ウコと栗のトゲを比べていた。子どもたちは、虫眼鏡を使ったり触ったりをしていたが、途中他の先生が生徒の中に入り、その2つのトゲでちり紙を刺し、何枚までささるかをやってみせていた。目で見てすぐわかりやすく調べる上で1つの方法だと感じた。また、今日栗について調べるうえで別の角度からの方法もあったのだと考えるきっかけとなった。その4「葉っぱ博士になるのだ！」グループでは葉のにおいや手触り、形を調べる取り組みで、においや手触りを感じさせるための道具は、身近なもので簡単に作ることができそうなので今度園児とも体験したい。

こんなどれもわくわくする内容だからこそ、子どもたちに同じ経験をさせてあげられたらいいなと思った。

この授業を通して、改めて幼稚園でも子どもたちに身近な自然に触れさせ、その5感に訴えられるような保育を行っていきたいと思った。小学校に入ってから、決して無駄にはならないことを実感した。そして、これからも、子どもたちにつけさせたい力・願いをしっかりと方向付け、保育にあたっていきたいと思う。

## 石教研専門部会研究集会に参加して

西川 加奈子

今回、石狩市の南線小学校で1年生の図工の授業を拝見させていただきました。

授業の題材名は『おもしろいかたちいっぱい~いしのへんしん~』で、内容は石を粘土で接着し、好きな形を作るというものでした。石は子ども達が学校や家の近所、出掛けた先で拾ってきた大人からしてみれば、ごく普通の石です。しかし、子どもにとっては一つ一つこだわって選んだ特別な石でした。一人ひとりに用意されたペットボトルの石入れには、触り心地、色、大きさ、形、それぞれ気に入ったものを入れており、とても大切にしている様子が伝わってきました。この気持ちが作品を大切に作る気持ち、愛着に繋がっていくのだと感じました。そして、本時の前に石と存分に関わる時間を多く取ったことで、さらに愛着を深めることとなり、製作時の集中力にも繋がったのだと思います。

さて、本時の製作についてですが、石を粘土で接着する方法を見て、驚いたと同時に感心しました。粘土が机や床にくっつく場面はよく見ますが、それを接着剤として使うことを思いついたのは画期的だと思います。しかも、粘土だと接着剤のように固まるまで待つ時間が省けますし、ホットボンドのように火傷をしたり、誰かの手を借りたりする必要もなく、すべて自分の手で仕上げることが出来るというメリットがあります。また、上手く接着できない時に、どのようにすればしっかり接着するのか、試行錯誤しながら作品を作ることが出来るのも、この方法の良い点だと思います。実際に製作していた子ども達を見ると、自分の思い描くものを自らの手で作り上げるために真剣に取り組んでおり、一人の力で行うと、集中力がより一層高まることを改めて実感させられました。

この授業に至るまでの過程をまとめると、このようになります。まず石と出会い、存分に関わることで愛着を深め、並べながらイメージを膨らませる。そして、粘土で接着する方法を知り、自らの手で作品を作る。この一つ一つの過程を丁寧に行ったことが、今回の素晴らしい授業に繋がったのだと思います。逆に一つでも欠けてしまったら、石への愛着や製作への意欲が少なくなったかも知れません。幼児も同様で、子どもの好奇心を掻き立てることが「作りたい」という気持ちに繋がります。

このように、製作まで時間をかけて気持ちを高めるということは、小学校も幼稚園も一緒なのだと思います。この課程を大切に、興味や関心が高まって「作りたい」という気持ちが生まれた時、確かな表現が出来るのではないかと思います。また、確かな表現は自主性なしに出来るものではないと考えました。

子ども達が確かな表現をしていくために、幼稚園では自分の想いを確実に表現出来るよう、様々な素材に触れ、好きなものを存分に作っていけるよう援助していこうと思います。そして、出来上がったものをしっかりと認め、子どもと共感する気持ちを大切にしていきたいです。

# 石教研国語部会二次集会に参加して

恵庭幼稚園 大徳 佳子

保育者になってから小学校の授業を見せていただくのは二回目でしたが、今回のように指導案があつての見学は初めてだったのでとても興味深いものがありました。子どもたちは、たくさんの来校者に興奮気味の様子が見られながらも大きな声で元気の良い挨拶ができており、授業が始まると教師の話聞く姿勢がとれ、「けじめのあるクラス」という印象を受けました。また、二学期も半ばを迎えクラスのみとまりが出てくる時期だと思われませんが、教師と児童の雰囲気がとてもよく、子どもも落ち着いており毎日がとても楽しそうなクラス作りができているように感じました。

今回の国語科の教材となった「けんかした山」は、私が小学一年生の時に授業で受けたことしかなく指導をしたことがある先生方が多い中、懐かしさ半分、当時の担任が私たちに何を伝えたかったかが明確になった状態で教師と児童の狭間に立っているような不思議な気持ちで授業に参加しました。

四の場面の授業でしたが、一の場面からの山の様子絵によって教室一面に掲示しており、今までの授業の流れがスムーズに頭に入ってくる環境が素晴らしいと思いました。そして、何よりも効果的だと感じたことは、担任の先生の「手描き」ということです。教科書を拡大コピーしても山を描くことはできますが、あの先生の手描きの絵の方が何倍も何倍も味があり、あたたかさを感じる絵でした。もしかすると、動物達も先生の絵で付け足すとワークシートにもでてきたかもしれないと感じました。しかし、子どもたちは山の絵に興味を持ちおそらく初めて絵を見た子どもたちは大きな山にとっても喜んだことと思います。当園でも教材作りは、なるべく教師が手をかけることを心がけています。手間はかかりますが、やはり子どもの反応が違ってきます。「せんせいかいたの？ つくったの？ すごいね～がんばったね～」と嬉しくなる言葉を言いながらピカピカの目で真剣に話を聞いたり見ている姿を見ると、気持ちが伝わるのだと身をもって実感します。ですから、感受性が豊かな幼年期に小学校でも温かみのある授業を見ることができ「手作り感」の大切さを新たに感じることができました。

また、この話は二つの山の気持ちを読み取るための手立てとして「キーポイントの言葉のおさえ」、「ワークシートの活用」、「動作化、劇化の試み」ということで授業が進められていきましたが、幼稚園との共通する面や小学校ならではの面など様々な面を見ることができました。まず、「キーポイントの言葉のおさえ」では、授業後の分科会でも出たように教師側の言葉の押さえ方であったり、子どもの理解度の押さえということに関しては幼稚園も同様であります。指導的な言葉に関しては、基本的な言葉が多いので特に問題はないのですが、今わたしが気になることは、生活のなかでの言葉です。4・5才の幼児は良い言葉も悪い言葉も善悪関係なく言葉を吸収し活用しようとする時期にあります。最近、子ども同士の会話で「キモイ」という言葉がよく聞かれます。言われて平気な子もいれば嫌な子もいます。先日、クラスで子どもが「キモイ」と言われたと訴えてきたので、言った子どもにどのような意味かを聞いてみました。すると、その子どもは「わからない」と答えました。このように意味もわからずなんとなく言葉を交わすということは自分の発する言葉で相手がどう思うかということを考えられない、いわゆる人の気持ちを考えよ

うしないということに繋がると考えます。現在は、言葉でのいじめも多いと聞きます。ぜひとも、教師側が正しい言葉を理解し幼児期の段階から小さな芽を取り除き正しい、人の気持ちを考えられる言葉遣いができるよう毎日の生活の中で指導していきたいと思えます。

そして「ワークシートの活用」、「動作化・劇化の試み」では物語を読むことで、自分で想像した台詞を文字で表しており年長組からの大きな成長を感じました。また、紙袋やビニール袋を使った発表は、アドリブも見られ逆に紙面に囚われない自由な表現が見られたりと今、当園で取り組んでいる発表会の目指しているねらいの延長線で、そのまま発表会で演目として発表してみたい内容でした。「楽しさ」の要因も取り入れつつ内容をしっかり捉えることができるとても良い教材だと思いました。

今回の授業を参観させていただき、小学校の指導の内容、取り組み方、考え方を知ることができました。そして、子どもたちの授業態度もとても素晴らしく感心しました。小学校の座学にスムーズに入れるように幼稚園で身につけようとしている、遊び中心の生活の中で人との関わりを楽しみながら自ら生活を進めようとする力、「動」と「静」のけじめ、挨拶や返事など基礎基本のしつけなどの大切さを改めて再確認することができました。様々な面でたくさんを感じることができ、このような機会に参加できたことをうれしく思います。準備から当日にかけ携わった先生方、本当にご苦労様でした。そしてありがとうございました。

## 石教研生活科部会に参加して

恵庭幼稚園 対馬 清香

今回、北陽小学校1年生の生活科の授業を参観させていただき、とても参考になりました。小学校の授業、生活の授業というものをこれまで見る機会がなかったので、貴重な時間を過ごせたと思っています。

なぜ、今回の石教研で生活科を選択したのか、それは“生きる力”をどのように小学校の学習の中で育てていくのか、実際の現場を通して勉強したかったということと私の幼稚園においてもこの“生きる力を育む”ということを重要視して保育をしているためです。小学校では具体的にどのように子ども達へ指導しているのか、環境設定や教材、支援はどう用意・工夫されているのかを中心に授業を見させていただきました。

率直な感想として、決められた短い時間の中で“生きる力”を身につけることは、やはり容易ではないと思いました。教材等を含めた環境整備もとても重要になるからです。また、“何を目指しているのか”“子ども達に何を感じ、考えさせたいのか”がとても明確にひとつの授業が構成されていると感じました。1つの教材について、とことん調べ、子ども達の好奇心を高められるよう、五感を刺激できるよう工夫された授業でした。

特に私が注目したのは、“葉っぱ博士になる”をテーマに葉を観察していたグループです。視覚に頼らないようあえて使わず、触覚、嗅覚を見事に活用させていました。途中、視覚に頼ってしまった子がいて残念でしたが、それは問題に正解しなければいけないと思ってしまったためにした行動ではないかと思いました。正解、不正解ではなく、自分が感じたままを記録できる工夫があっても良いのではないかと思いましたが、そのグループの子ども達はみんなとても真剣で、楽しそうで、興味を示していることがよくわかりました。これは想像力がよく働くだけでなく、自然に対して子どもの持っているイメージの視点を換え、全く違った世界を作り出せる活動であると感じました。こうした経験をした子どもは、自然と何事にも興味や好奇心を持って、自分から行動する力が身につくと思います。これが“生きる力を育む”ことにつながるのだと考えます。幼稚園では、これを生活そのものと連携して保育をし、季節にあわせて環境作りをし、1年を通して“生きる力”を身につけさせます。それをこれからどう小学校へとつなげていくのか、今回の研修を参考に今後をもって研究していきたいです。

また、今回授業中の子ども達を見ていて、全員が教材である『くり』に興味や探求心を持って参加していることが強く印象に残りました。このことがまず一番大切なことであり、興味を持っているからこそ子ども達が積極的に授業を展開することができていました。“何をしたいかわからない・・・”という子は一人もいませんでした。そして自分たちでしっかりと役割を決め理解し、自分が担当の役割は責任を持って仕事をしていました。これも大切なことであることを改めて感じ、小学校へ行ってからスムーズに自分たちで行動できるように、幼稚園から指導をしっかりしていきたいと思いました。今回、研修に参加し、子どもの年齢に合わせた教育内容をこれから幼小連携して考えていくべきだと強く思いました。